Gender×スポーツ

東京2020大会を見据えて

第5回　人見絹枝と有森裕子

田中 ひかる

一九二八年のアムステルダムオリンピックから、陸上競技への女性選手の参加が認められた。これは〝聖域〟に女性を入れたくなかったクーベルタンが、IOC会長を引退したことによる。しかしIOCは、女性選手の「参加」は認めたが、「得点」は認めなかった。

日本人女性としてただひとり、アムステルダムオリンピックに参加した人見絹枝は、選考会で世界新記録を出すことができた百メートル走で、メダルを狙った。日本の新聞は予選の様子を「女がトラックを走るというので野次馬たちは喜んだが、選手たちは女らしくない断髪で、恰好も男のようだった。しかし走るのが鈍いところはやはり女だ。西洋の女に比べると、絹枝嬢の態度や脚は男のようだった」と報じた。

優勝候補と見なされていた絹枝は、予選は一位だったが、決勝では四位となってしまった。このままでは日本に帰れないと思いつめた絹枝は、念のためエントリーしていた八百メートル走に、急きょ出場することにした。

監督は、「世界の強豪たちを相手にいきなり八百メートルを走るなんて無謀だ」と止めたが、絹枝は九人の外国人選手たちとともに、世界記録を大きく上回るスピードで走りきり、準優勝を果たした。ゴール後、倒れ込む選手が相次いだため、このレースは「死の激走」と呼ばれ、以後、一九六〇年のローマ大会で復活するまで、女子八百メートル走は廃止された。

その後も絹枝は、国内外の大会に出場し、その合間を縫うように女性スポーツ興隆を目的とした講演会を年間二百件以上もこなした。そして、過労から肺炎を発症し、一九三一年八月二日、二四歳で亡くなった。

一九九二年の同じ日、絹枝と同じ岡山県出身の有森裕子が、バルセロナオリンピックのマラソン競技で銀メダルを獲得した。これは、絹枝の「死の激走」以来、六四年ぶりに日本女子陸上界にもたらされたメダルだった。この年月の長さが、二人の記録がいかに特別なものであったかを物語っている。

100メートル走予選で1位になった人見絹枝

「死の激走」と呼ばれた800メートル走

アムステルダムオリンピック（1928年）のパンフレット

たなかひかる：コラムニスト。歴史社会学者。生理用品連絡協議会共同代表。横浜国立大学大学院博士課程修了、博士号を取得。時代に翻弄される女性の研究を続ける。現在は1928年アムステルダムオリンピックに唯一の日本人女性として出場した人見絹枝について執筆中。著書に『生理用品の社会史　タブーから一大ビジネスへ』ほか。『「毒婦」　和歌山カレー事件20年目の真実』を2018年7月に発刊。